

伐採で是非論浮上

京大植物園 広く知って

教員や住民が考える会発足



国内外の植物を収集している京都大理学部付属植物園(京都市左京区)を広く市民に紹介しようと、大学関係者や近隣住民がこのほど「京大植物園を考える会」を発足させた。本年度から市民向けの観察会を月一回開催する。園内の伐採の是非をめぐって学内外で議論が起ったのがきっかけで、「多くの人に園に親しんでもらい、よりよい運営を考えたい」とメンバーは話している。

月一回 観察会を開催へ

付属植物園は一九二三年(大正十二年)年、京大北研究フィールドになった部キャンパス内に開設された。樹木や草、野鳥、昆虫などが共生する「生態植物園」として開園したのが特徴で、約一万八千方に歴代の研究者が集めた植物約五百種が植えられている。これまで多くの学生の日照などをめぐって教職員、住民、学生の間さまざまな意見があることから、有志が「園を市民に広く知ってもらい、一緒に考えよう」と会を設立した。

会の賛同者には河野昭一・京大名誉教授、岩槻邦男・兵庫県立人と自然の博物館長をはじめ、五百人以上が名を連ねている。園内にはアジア各地で採集された植物が多く、メタセコイヤ、イヌカラマツなど、日本では絶滅し「生きた化石」と呼ばれている樹木も中国から持ち込まれて育てている。

観察会の日程などは随時、ホームページに掲載する。アドレスは<http://members.tripod.co.jp/bgarden/>

池や湿地も設けられた植物園内。多様な動植物が共生している(京都市左京区・京大)